

特集「情報システム論文」の編集にあたって

窪田 諭^{1,a)}

IoT, ビッグデータの進展に加え, AI, 機械学習の活用が進み, コロナ禍における急速なデジタルトランスフォーメーションの進展によって, 情報システムを取り巻く社会環境は大きな変化を迫られている. 実社会の問題を解決するために, 情報システムの研究・開発は重要な役割を担っており, その過程で得られた知見を共有することは, 現代社会の礎となる. 「情報システムと社会環境研究会」(IS研究会)では, 情報システムの普及と啓発に寄与すべく, 2005年以來, 毎年情報システム論文の特集号を企画し, 良質な論文を採録してきた.

本特集号では, これまでの特集号と同様に, 情報システムの分析・設計・構築・運用と利用に関する理論と実践, および情報システムと人間・組織・社会との相互関連や, さまざまな組織でのシステム開発から得られた知見や情報ニーズをとらえた新しい情報システムの提案など, 広範囲な対象の論文を募集した.

投稿論文は24件であり, 一昨年度の9件, 昨年度の20件から増加した. 投稿論文には, 情報システムグループのキーワードをまったく含まないものもあり, 幅広い分野からの投稿であった. 最終的な採録論文数は10件であり, 採録率は42%となった. 採録率の目標を達成することはできなかったが, 良質の論文を掲載することができたと考えている.

採録された論文は, サーベイ論文, システム開発, セキュリティ, 機械学習などと多様であり, 募集の狙い通りに, 情報システム論文として相応しい, 広範な論文を採録できた.

情報システム論文は, 対象とする範囲がきわめて広いこともあり, 論文としての有効性の評価や正確性を確保するのが難しい. このような課題に対する取り組みとして, IS研究会では, 情報システムの有効性評価手法として, 量的評価と質的評価のガイドラインをそれぞれ公開している. 本特集号では, これまでと同様に論文募集文にて前述のガイドラインの参照を促した. 質的研究論文の査読にあたっては, 査読者にもこの文書の参照を依頼して査読基準の統一を図った. また, IS研究会では, 特集号への投稿を促す意図も含め, 研究発表会において質疑応答の時間を長めに

とったセッションを企画するなど, 投稿論文の質・量の向上に向けて取り組んだ. しかし, 今回投稿された論文においても, 適切な量的・質的評価を基にした論文の有効性が記載されていない状況が散見された. 引き続き, 情報システム論文における量的・質的評価方法に関する学びの機会について, IS研究会の分科会活動と連携しながら検討していきたい. また, 広義の情報システム論文ではあるものの, 情報システムの要素技術としての性格が強い論文が複数件投稿され, 情報システムの必要性や有用性が十分に延べられていない論文があった. 情報システム論文では, 内容の新規性, 有効性, 信頼性に加えて, 社会や組織の活動にとって意味のある情報システムとしてまとめる観点が重視される. 情報システム論文の位置付けや量的・質的評価に纏わる取り組みが, 情報システム研究の発展につながることを期待している.

最後に, 本特集号の機会を与えていただいた論文誌編集委員会, 短い査読期間の中で丁寧に査読していただいた特集号編集委員, 査読者各位, スケジュール管理を含め様々な支援をしていただいた学会担当者の方々に感謝の意を表します.

「情報システム論文」特集号編集委員会

- 編集委員長
窪田 諭 (関西大学)
- 幹事
柿崎淑郎 (東海大学), 後藤 晶 (明治大学)
- 編集委員
阿部昭博 (岩手県立大学), 居駒幹夫 (青山学院大学), 今村 誠 (東海大学), 大場みち子 (公立はこだて未来大学), 荻野紫穂 (武蔵大学), 兼宗 進 (大阪電気通信大学), 北原鉄朗 (日本大学), 児玉公信 (情報システム総研), シャフリル バンダラ (日立製作所), 富澤眞樹 (前橋工科大学), 畑山満則 (京都大学), 深田秀実 (小樽商科大学), 本田正美 (関東学院大学), 松澤芳昭 (青山学院大学)

¹ 関西大学
Kansai University, Suita, Osaka 564-8680, Japan
^{a)} skubota@kansai-u.ac.jp